第４期男女共同参画審議会第２回全体会　会議録

１　日　時　　平成２２年８月１０日（火）１４：００～１６：００

２　場　所　　兵庫県看護協会会館　多目的室１

３　出席者　　大森綏子委員、梶元梨香委員、上林憲雄委員、小林俊彦委員、高島進子委員、田中裕子委員、田中雅美委員、田端和彦委員、西馬きむ子委員、西嶋保子委員、野々山久也委員
清原理事、高井総合政策室長、梅谷県民文化局長
横山県立男女共同参画センター所長、河田男女家庭室長

４　内　容

(1)　開　会　あいさつ

(2)　議　事

＜「新ひょうご男女共同参画プラン２１」の骨子素案について＞

（委　　員）　柱にある「お互いに支え合う“おかげさま”の家庭と地域づくり」は、最初は「互いに支え合う」という言葉が無く、政策部会委員の意見で、このように入れた。“おかげさま”という言葉については、政策部会で議論が進行中で、みなさんとも議論を交わさないといけないと思っている。他と比べて違う言葉で表現しようとしているのだが、これではまだ、ニュアンスが十分に伝わらないと思う。「お互いに支え合う“ありがとう”のあふれる家庭と地域づくり」とした方がわかりやすい。“おかげさま”とは何のことかと思う若い人がいるのでは。

（委　　員）　私が子どもの頃、「おたがいさま」はよく聞いたのだが、“おかげさま”には違うニュアンスがある。そのあたりのことは政策部会で出なかったのか。

（委　　員）　“おかげさま”は、二人関係の中で相手に感謝するというニュアンスと違い、相手や地域の人たちに感謝しているというより、「お天道様のおかげで」とか、違うところに感謝しているように感じる。悪い言葉ではないが、もう一度考えてみる価値はあると思う。

（事 務 局）　事務局で案を作る際に、「おたがいさま」という言葉も出た。ただ、「おたがいさま」では、ギブ＆テイクという形で、私たちが思っているような感謝、思いやりとか、ありがというといった思いが入らない。“おかげさま”の方が、みなさんの愛のある男女共同参画を進めていくためには良いのではないかと考えた。

（事 務 局）　これは、但馬・丹波地域の郡部の方々との話の中で出てきたもの。今、県民とのリレートークと、議会各会派との協議等を平行して実施しているのだが、男女共同参画は「堅い」「いかにも権利の主張だ」と言われる。ギブ＆テイク、「私がやってあげるのだから、あなたもやる」「家事・育児も半分はあなたがやるんだ」というようなニュアンスが強いと言われる。

そのため、現プランが県民の暮らしと非常に離れた感じがあって、特に郡部では、性別役割分業意識、男も家事・育児を半分やれというのが１つ、女を登用しろというのが２つ、セクハラをするなというのが３つ、この３つが男女共同参画だと思われがち。そうではなく、一人ひとりがたくさんの人間関係を紡ぎながら、いきいきと暮らしていくことができるような社会、そういう柔らかい雰囲気を出したい。今言われたように、目の前のあなたへの感謝というだけではない。「私た

ちの地域では“おがけさま”は、あなたが何かをしてくれたから『ありがとう』と言うだけではなく、社会全体に対する感謝の気持ちを表す心の言葉として使っている」という話が県民の方からあった。

県では、この３月に「新ひょうご子ども未来プラン」を策定しており、そこに入れた“良きおせっかい社会”という言葉にも非常に議論があった。“おせっかい”されたくないから都市部のマンションに住んだりするのに、という議論もあったのだが、今はいろんな所で「あ、あの“良きおせっかい社会”のプランね」と言われて、県民にも非常に説明しやすい。そうした特に郡部の方からの声と、併せて事務局でも、誰にも覚えてもらえないようなプランよりは、「あの“おかげさま”のプランね」と覚えてもらえるようなものにしたいと考えた。

何かやってもらったから感謝する、やってもらった分だけ感謝するのではなくて、かつての日本社会は、お天道様への感謝といったことも含めて、もっと社会全体への感謝があったのではないか。そうした何か温かいものとして、新プランを作り上げたいという声もある。「男女共同参画」自体が角張っているので、変えるべきではないかという意見もあるが、「男女共同参画社会基本法に基づく法定計画なので、この言葉はこのままでいかせてください」と言っている。そうした非常に柔らかくて温かい、単なるギブ＆テイクや権利主張、男も家事・育児を半分やれとかいうことが男女共同参画ではないというニュアンスを出したい。

（委　　員）　「新プランのめざす社会」に、「絆を深め」を入れて、「多くの人間関係を紡ぎながら、絆を深め、いきいきと暮らせる社会」としたらどうか。今１００歳以上の高齢者が行方不明になっているのは、その家庭の絆、地域の絆というのがなくなってきている所だと盛んに言われている。

“おかげさま”に関しては、あまり違和感なく聞いていた。今、言われた「ありがとう」という言葉と、どちらでもいいように思うのだが、兵庫らしさとなれば、“おかげさま”がいいのかなと思ったりする。

（委　　員）　地域のイベントで、子どもを預かることになった時に、子育て中のお母さんから「預かる方は、資格を持っているんですか？」と質問された。また、イベントですごく親しく話をしていても、次に会った時には知らん顔をされる。現代人は、単発的な人間関係を望んでおり、深く関わろうとしない。そんな中で、“おかげさま”の家庭と地域づくりとして、どのように具体的な施策が組めるのか。

（委　　員）　私が言った「ありがとう」は、“おかげさま”とは離れるかもしれないが、もっと対人関係を、いろんなことをやっている一つ一つをもっと大切にするにするということ。もっと紡ぐというか、そういうものが薄くなってきている。私も、うちのゼミの学生なのに道で会っても知らんふりをされることがある。今はそういう社会になっている。そういう意味では、この人に何かしてもらったことで「ありがとう」とお礼を言うということが、まず要るような気がする。

（委　　員）　私は、“おかげさま”はいいと思った。私たちが生きていく上での生活というのは、ただ地域とか小さな単位ではなく、太陽の恵みや水の恵み、目に見えないところ全体を指すものだと思う。その先にはやはり、誰に対してでなくても、安心して暮らせる社会に感謝する“おかげさま”という言葉がある。

先程言われた“おせっかい”も、得てしてマイナスのものと見られがちだが、実は考え方によってはすごくいいことで、昔は“おせっかい”おばちゃんがいて、頼まれもしないのに走り回っていた。今は人の世話を焼かない。結婚問題にも大きくマイナスになっていると思う。“おせっかい”の心というのが、知らず知らずに私たちの生活を潤していたところがある。これも“おかげさま”ということかなと思う。私は、“おかげさま”は、すごく大きな意味を持っているような感じがする。

（委　　員）　事務局や委員の方の思いもよく分かるが、やはり“おかげさま”は超社会的な、「お天道様のおかげで」というような感じがする。男女共同参画社会というのは、本当にまだこれから創っていかなければいけないもので、すごく努力しなければ実現しないような理想。その時に、“おかげさまで”というと、意識を変革しながら理想に向かって生きていく主体性みたいなものが何か希薄に後退してしまうような、そういう印象がある。

（委　　員）　政策部会において、「“おかげさま”は、本来自然に出てくる言葉で、非常に個人的なもの。県民は行政から押し付けられているように感じるのでは」という発言があったことを記憶しておく必要があると思う。むしろ、だから県が言うことに意味があるのだという説も逆にあるかもしれないが。

（委　　員）　人間は誰しも１日２４時間で、その中で労働時間、サービス残業が当たり前になっている。１日１２時間や１５時間も働いていたら、地域や家庭に帰る時間がない。例えば睡眠時間と食事や排泄、入浴の時間など、２４時間から８時間除いたとして残り１６時間。それを何に使うかと言うと、荷馬車のように働いている。そして病気になったり、いろんな状況にあるのが２０代後半～３０代の氷河期世代。サービス残業や、おかしい労働条件が当たり前になっている所をきちんと管理して摘発していければ。こんな状況だったら、次世代を担う子どもも当然産めないし育てられない。そういう八方塞がりな状態がある。

また、男性の育児休業を取りたいと言った時に、それを認める経営者がいない。経営者からすれば、それなりのポストで１００％、１２０％人材を使いたい。競争社会を勝ち抜くために、働かせるだけ働かせたいと考えている人が大半だと思う。この前、同年代の方に、「自分たちは経営者の道具だと思っていたら、そうではなかった。自分たちは燃料だった」と言われた。燃料は使い切ったら何も残らない。本当に身体がボロボロになっている状態の人がいる。もう少し刺さり込むような施策で、労働時間をうまくコントロールして地域や家庭に帰れる時間を確保する、労働環境を整えていくことができれば。兵庫県では経営者に働きかけて、労働環境を整えているとアピールしたら、「それなら兵庫県に住みたい」と、人口増も図れるのではないか。

（委　　員）　政策部会の開催概要資料でも、「国民全体で企業を監視」という意見があるが、それはそうだと思う。

（委　　員）　経営者の立場から言うと、政策部会の報告にもあったように、ワーク・ライフ・バランスは、仕事と生活を天秤にかけて重さを量るような、量を量るものではないと思う。仕事は量ではなくて質、やりがいの方が重要。みなさんそうだと思うが、仕事をやればやるほど仕事が増えてしまう。できる人ほど一杯仕事を抱えて

しまい、仕事が磁石のごとく寄ってきてしまう。そういう意味では、ワーク・ライフ・バランスを叫んでいる人ほど、それを実践できていないのが現状。

私は会社を起ち上げた時から、ワーク・ライフ・バランスを実行できるように、それぞれのライフスタイルに合わせた１ヶ月の就業時間を選べる形にしている。１ヶ月に少ない人で７０時間、多い人だと２００時間くらい。しかし結局中身は、要するに質。今言われたように、燃料のように燃えて燃え尽きて消えてしまうのではなく、燃えてますます新しい何かを作り出すという形でないと、ワーク・ライフ・バランスは絶対に世の中に普及しない。

私は若い頃から、「私の方が絶対就業時間が長い。子育ても家事も含めると２４時間のうち２０時間は働いている」と夫に言い続けてきた。世の中ではなぜ、家事労働も「ワーク」だという考え方ができないのか。起業して２５年になるが、ずっとそれをみなさんに訴えている。そういう考え方をしないと、マイナス面ばかりが強調されてしまう。男女共同参画がうまくいかないのは、そこだろうと思う。女性の側が逆に変に引いてしまっている。もっと自分の家事労働を美化して訴えていけばいいのではないか。そうすると男性も家事労働にもっと参加して、マイナス面でなくてプラス要素として参加するようになるのではないか。

（委　　員）　主夫の立場から言うと、家事は本当に大変。大変だけどやりがいもある。以前、子育て支援講座で、高齢の男性が女性講師に「私も長い間生きているけど、主婦が忙しいのが未だにわからない」と言われたのが強く印象に残った。また、今、講師養成講座に参加しているのだが、そこでも高齢の男性が、講座に全く関係のない本を講座中に読んでいて、何をしに来たのか疑問に思った。ある一定の年齢層は、いつまで経っても理解を示そうとしない。一部そういう人たちがおり、今回「男性にとっての男女共同参画」が項目にも挙がっているので、そこにも目を向けてもらえれば。

（委　　員）　ワーク・ライフ・バランスの問題は、働く勤労者の立場に立つか、経営者のマネジメントの立場に立つかによって、変わってくる。ただ、兵庫県、行政の立場としては、どちらかに寄った施策は出せないので、勤労者の立場からの施策は立てやすいと思うのだが、やはり社会全体、経営者と労働者どちらの立場も勘案するような観点で、施策を立てざるを得ない。昨今のワーク・ライフ・バランスの議論は、労働者の立場に立ち過ぎというか、そちらの観点からの議論が多い。だから、労働時間やサービス残業を減らすべきだという議論になる。もちろんサービス残業はあってはならないことで、減らすべきだが、社会全体の健全な発展という観点からすると、ワークと天秤にかけてライフを充実させようという方向だけに進んでいけば、企業の元気がなくなっていく。

兵庫県ではないが、私が他で政策を考えた時に、ワーク・ライフ・バランスの実現には、３つのステップがあるという議論をした。ファーストステップは、量的な側面での労働時間とか、いわば天秤にかけるような部分。時間を有効に使い、無駄があれば働き方を変えて、あるいは業務の遂行の仕方を変えていく、これがファーストステップ。無駄の削減という量的な側面での動きとなる。

セカンドステップは、今度は質的な側面で考えてみること。例えば、仕事を楽

しんで一生懸命働いている従業員は、家に帰ってからも良き父親、良き地域住民であり、逆に職場であまり仕事をしていない人は家に帰ってからも、仕事で疲弊し精神的なストレスを発散できず、あまり家庭がうまくいっていないというデータがある。だから、仕事も楽しく家庭も楽しくというシナジー効果をきちんと出していくこと、つまり労働の質的な側面も考えてみようということ。

サードステップは、量と質の組み合わせ、要はダイバシティという言葉があるが、多様なその人個々人にとっての働き方、あるいは選択の余地がたくさんある社会をめざしていこうということ。経営者の本音を聞くと、表立っては言わないものの、「ワーク・ライフ・バランスは仕事をサボるための口実だろう」と誤解している経営者も多数いる。そういった誤解を解くためにも、質的な面での見直しという、量と質の両方を見ることが必要だ。

（委　　員）　働く女性のためのシステムとして、保育所が必要であるということが出ているが、子どもの保育をするのは、女性の次が行政で、男性は一番最後というニュアンスに取れる。女性が子どもを見られないなら、もっと家庭で見ればいいのに、保育所を整備しなければならない。では、お父さんは一体どこにいるのか。

今は男性の１００％の働き方では、保育所の送り迎えは不可能だし、休日も出勤しているので子どもと接する時間がない。私たちがアンケートを取ると、母親が男性と同じように自分の力を発揮して外で働こうとした時に、「朝７時から夜８時まで子どもを預かってくれる保育所がほしい」という回答があった。自分が本気で働くために、そこまで追い詰められている働く女性の状況がある。男性と女性の意識、それから職場の意識、企業の意識に、もう少しきちんと整合が取れれば、ここまで追い詰められないということがたくさんある。

仕事に一生懸命な両親、ほとんど家にいない両親の子どもは、いろんなところでたくさん不安を抱えて育つし、それが本当に将来の社会のために良いのかと、その辺の不安もある。安定した家庭生活ができて初めての仕事だと考えるので、仕事がいくらおもしろくても、家庭を顧みないで働き続け、本当に人生それでいいのかなと思う。そういう観点から、家事労働についても家庭の中でどちらがたくさんするということではなく調整だと思うし、同じように仕事と自分の家庭内の生活の調和を考えるためには、職場の理解が不可欠。家庭をきちんとすること、円満な家庭生活を営むための男女共同参画だと私は考えている。働き方の問題や女性雇用、女性の社会進出がメーンになるのではなく、安定した生活ができる社会というのが基本になると思うので、そういう視点からの施策をお願いしたい。

（委　　員）　私は７時からの保育を保育所などでやってきた人間なのだが、やはり環境が整えば整うほど、子どもたちは一生懸命がまんすることになる。会社としてはお母さんに来てほしいから、「子どもを預けて来なさい」と言う。企業にそんな時間から働かせないでとか、お父さんを早く帰らせてと言っても、企業の言い分はあると思うので、県などが、子育てしやすい働き方ができる企業を、もっとどんどんＰＲするなり、支援金を出したらどうか。お父さんが子育てのために、有給休暇を１週間使って休んだりすることが多くなっており、有給であれば、期間も短いから休みやすい。やはりお金の問題もあると思う。環境を整え、保育所をつく

るというのは大事かもしれないが、私は毎朝、「何でこんな小さな子が、朝早くから来なくてはいけないのか」と切ない思いで見ていたこともあり、企業内保育所を設置している会社を県でＰＲするなど、何か会社にもメリットがあるような形で支援できれば、少しでもそういう子どもを減らせるのではないか。

“おかげさま”という言葉は、私も気になった。他のところと比べても何か合わないというか、直接の関係ではなく、誰かの別の力が入るのではないかと思う。先程言われた「ありがとう」という直接的な言葉の方が、私はしっくりときた。

もう一つ気になったのは、これらをチェックする機能のこと。主要事業がいろいろ出ているが、やりっ放しでは困る。例えは「わくわく親ひろば事業」が去年から始まっているが、内容によっては「これは親育ちにはならないだろう」というものがあるのを見ていると、チェック体制も必要だと思う。計画期間を短くして５年間としているが、この途中で何らかのチェック機能が入って内容が変わることもあるというのが、どこかに入ってもいいのかなと思う。

（委　　員）　大阪で、地域の公民館や会館のカウンター前に、子どもたち専用のスペースがあり、子どもが自由に出入りしているのを見かけた。この施設が閉まるまで居てもらったらいいということになっている。目の前で地域の子どもを見ながら、子どもも大人から見られているということで、安心できる。そんな場所が、地域にある。

配布資料に「女性は家庭に入っていると健康管理が難しい」とあり、これに関心があったので、神戸市に直接聞きに行った。やはり健診を受ける女性は少ないらしい。市の担当者から「データは見せられないが、数字だけお知らせできるのでメモをしてください」と言われ、メモした。子育て世代の人が健診に来れば、子どもを預かる保育の場があると健康診断に気軽に来られる気がする。４０代に限っては、男性が１０％、女性が１４％と多いということなのだが、その他の資料は教えてもらえなかった。開かれた情報がなくて本当に健康管理ができるのかということと、親の健康管理が思うようにできないのに、子どもの健康管理ができるのかなという不安に思った。

（委　　員）　私も政策部会で策定の側に立って議論してきた。新プランで一つ特徴的なのが、男女がというより「誰もが」というところ。これはおそらく、みなさん今日の話で共通しているところかと思う。

政策部会でまだ十分議論できていなかったのが、男女共同参画の考え方そのものとしてはこれでいいとしても、現状と合うのか、合わないという問題が出てきているのではないかということ。ワーク・ライフ・バランスの問題もそうなのだが、それだけではなく、例えば緊急性のあるもの、今雇用の問題でいくと貧困問題があるわけで、貧困に陥る可能性が高いのは女性だという事実があり、「誰もが」と言いながら、現実として出てくるその部分に対するイコライジング、是正をしていくということがまだ十分ではない。例えば労働の問題、女性のセカンドキャリアの問題などの話は出ているのだが、それ以上に問題なのは、現実の社会として起きている問題で、例えば女性の給与所得が男性の６割にとどまっている

という事実があり、そこから貧困に陥る可能性が高いと言われているわけだから、対策が必要。その部分をもう少し考えておかないといけないと思う。

また、主要事業にあるのは、基本的にはこの男女共同参画だけではない、「誰もが」という視点のところではあるのだが、「より女性に」というところをもう少し考えるのも必要かと思う。一方で「誰もが」と謳いながら、矛盾があると思われるかもしれないが、一定の部分のところは、やはり県としてきちんと考えて、あるいは保障しないといけないと考えている、と言うことは必要。

（委　　員）　県民意識調査結果の中で、寝たきりになった時に誰に世話をしてもらいたいかという回答は、配偶者が一番多く、娘が次になっている。しかし、農村地域では、息子の嫁というのがほとんどで９０％以上だと思う。自分が寝たきりになった時に配偶者が世話できるかと言ったら、私たちだったら男性の方が年を取っているというのが普通だし、そういったことは考えられない。仕事と両立するのはとても大変だと思う。会社に勤めるのも大変なことなのだが、家庭の中のそういう環境の問題は、なかなか今のところは改善されていない。

新プランの柱の、お互いに支え合う家庭と地域づくりの対象として、夫婦と子どもだけではなく、お年寄りを入れた方がいい。仕事や子育て、介護の問題も、それを一つの単位として考えると、家族の単位が大きくなれば解決する問題が出てくると思う。親が外で働いたり、家の仕事もしていると子育てが大変。今の子どもは、勉強は一所懸命しているが、体験というところができていない。いろんな生きていく知恵というのは、お年寄りから学べるところもあると思うので、主要事業にあるシルバー同居交流事業や地域孫育て事業など、それらもより拡大するような方向で進めたら、さらに改革されるのではないかと思う。

（委　　員）　調査対象者を見たら高齢者の男性が多いので、誰に看てもらいたいかというと配偶者や娘になったのだと思う。しかし、広く見た時には、やはりお嫁さんが一番多いのではないか。

（委　　員）　日本の介護保険制度では、家族がケアしても手当が出ないが、手当の出る国は非常に多い。ドイツも出るし、南米でも出している国があり、世界的に多い。

日本では制度をつくった当時、嫁が介護をするが当たり前の雰囲気だったので、もしお金を出してしまったら、嫁の仕事として国が位置付けてしまうことになり、これを肯定していいのかという議論があった。国でもその方が安くつくという面もあって、そうしてしまったのだが、今日見てみると、むしろその嫁という概念で面倒を見ている人がそんなに多いのかということがある。

ドイツでは、大した額ではないのだが、最初から家族に手当を出すことになっていた。ほとんどが娘が看ていたからで、娘が看るのが当たり前の時代に作った制度だから、スムーズにいった。

今日的には、日本でも介護するのは嫁よりも娘だという時代になってきているが、でも農村部では、嫁が看ている人たちがかなりいる。私は、かつての嫁としての概念で看ているのではないなという気がする。むしろ、夫のお母さんだからと、娘でもイヤと言う人がいるが、娘が親の面倒を見るのと同じ意味合いで、一所懸命になって看ている人がいる。少し話は男女共同参画とずれるのだが、私は、

そういう人にきちんと保障すべきだと考える。嫁でも自分で心から面倒を見ようとしている人たちを放っておくのではなく、それをきちんと評価する時代が来ている気がする。もちろん、ただ看ているだけでは、どうカウントするのかという問題もあるだろうから、地域で研修をして、例えばヘルパーの資格を取ったらどうかとか、もっといろんなことが考えられる。男女共同参画からずれると今言ったが、私の本当の気持ちでは、ずれないと思っている。これが男女の共同参画の非常に重要なポイントのような側面を持っているではないか。

地域社会では、先程の高齢者の話でも出てきたが、インターネットやパソコンの時代の中で、個人情報保護法が表に出て、実はそのことを通して被害に遭っている部分がたくさん起きている。先程言われた“良きおせっかい”というようなものまで全部拒否してしまって、地域が成り立つのかということ。そういう問題を「男女共同参画とは関係ない」とは言えない。ベースで非常に男女共同参画の問題と関連しているのではないかと思う。

（委　　員）　働く女性のためだけでなく、専業主婦で子どもを一生懸命育てている人たちを何らかの形で評価することが大事だと思う。子育てや家のことしかしてないから、社会的にだめだと思っている女性が今すごく多い。「働く気もないの？」と言われたり、虐待に走る母親にも専業主婦が多い。それはなぜかと言うと、全然自分が評価されていないと思っているから。いろんな人がいていいんだよと人権問題などでも言いながら、子育てをがんばっているお母さんを評価し、取り上げるところがあまりない。子育ても一つの立派な職業であるということを、もっと何かの形で出せないか。新プランの事業などには入らないと思うが、何かそういう文言が入ったら、お母さんたちも自信を持って子育てにがんばれるのではないか。

（委　　員）　ＤＶでも、夫が「お前は働いていないくせに」と言うケースがかなりある。それは、社会が評価しないからという面もある。この前、県の長期ビジョン関係で、各地域の代表が集まって来て議論した時もそうだったのだが、今は高齢者の問題ばかり論じている。子育ての話は少しだけで、たいてい少子化の問題として出る。高齢者の問題は大事だが、それはある程度解決する部分があり、子育ての問題は何か制度を作れば解決するという問題ではない。少子化の問題として、何か制度で解決しようとしているところが非常にある。そうではなくて、観念や概念というか、そういう側面から私たちが子育てとは何かを見ていかないと。そういう意味では全面的に子育てに取り組む状態を保障してもいいと思う。働きたい人は働いたらいい。しかし自分は子育てに取り組みたいという人が、取り組めるような状況をつくらないといけない。少子化の問題ではなく、日本の将来全体を考えた場合、非常に重要な問題。これも男女共同参画の問題だと思っている。

（委　　員）　最近の子育てが変わったと感じるのは、まず、親が乳母車を押しながら携帯をいじっている。また、家族で睦まじく旅行をしているかと思ったら、子どもは携帯用のゲーム機で遊び、両親はそれぞれの携帯で…。子どもと接する時は子どもに、夫婦で会話する時には夫婦で、お互い顔を見て会話しているのだろうかと最近疑問に感じる。子育て中の親を褒めてほしいとか、何かしてほしいと思うのも果たしてそれでいいのかなと疑問に思う。

（委　　員）　携帯の話では、柳田邦男さんが言われていたのだが、今の母親たちは、ネグレクトしている、この状況をネグレクトとして見るべきだと。子どもたちは、お母さんが関心があるのは自分ではないと思う。もう少し真剣に考える必要がある。

（委　　員）　介護は、実際には女性の方が負担している。介護保険制度にはいろんな問題がある。年金から介護保険料を取られ、制度を利用した自分自身へのサービスは受ける余裕ないというようなケースがあり、そういう方たちが、逆に家庭内介護を余儀なくされているような場合もある。そのような実態を考えても、また家庭での介護には、それ固有の意味があり、介護の現場に置かれている女性の立場をきちんと評価し、現実を見て金銭的な補助など、その対策を立てる必要がある。

今全般的に見た場合に、女性の賃金や困窮度のことをも考えても、まだなかなか男女共同参画に至らない、男女平等になっていないような現実にある。そこをどのようにしてすくい上げるかという点は、あくまでも一つの重点として考えてほしい。

ワーク・ライフ・バランスの問題は、やはり企業との関係があるので、行政の立場として対策が必要。企業がもう少しきめ細かな働き方の多様化を考えてくれればと思うが、なかなか難しい。日本が近代化以降、突っ走り過ぎているところを、どこかもう少し生活の調和を考えた生き方へ転換できたら。ヨーロッパの人などは生き方がもっとゆったりとしており、時間の流れもゆったりとしている気がする。そういう価値の転換ができたらいいと思うが、これは日本の大地に根差した風土や空気のようなところもあり、なかなか文化的な改革は難しい。

管理職への女性登用については、県や国では能力のある女性がいて、その女性がどんどん昇進していくことができる。建前としてもそうしていかなければならないと考えていると思うのだが、市町の人と話をしていると、女性が管理職などに上がっていけないのは、女性自身がやりたくなくて引っ込んだり、あるいは能力がないからで、能力があれば男性と対等に評価されるような社会になっている、今はもう男女は平等で何も差別はしていないという考え方が基本的にある。

そのような意識や、日本の女性がなかなか指導的な地位に就けない、審議会の委員にも出てこられない背後には、女性が公の場で自分の主張をすることに慣れていない、慣れてこなかった長い歴史があり、そういう能力や資質を養うチャンスもなかった。人間は、役割を得て初めて成長をする面がすごくあるわけで、これはジェンダーの問題なのだが、この問題は国レベルでも、男女共同参画社会基本法ができた頃から少し後退している。審議会への登用や昇進について、女性の積極的改善措置をもう少し考えてもいいのではないかと思う。多くの人の意識でも、女性や男性の資質や能力が歴史の中で文化的につくられているという認識がなく、社会的に地位を上げたかったら自分で努力したらいいという意識であるように思う。初期の頃からの課題ではあるけれども、積極的なバックアップがずっと持続して必要であろう。

（事 務 局）　今、兵庫県では農業に携わる方の５割以上が女性。しかし、農業委員は２．２％しかいない。これは全国平均と比べても半分。農業領域における女性の課題は、新プランにも必ず入れていかないといけないのだが、その点についてはどうか。

（委　　員）　農家の女性がもっと声をあげていかなければ。実働時間は、女性の方がたくさん働いている。ところが政策の場に出るやり方が昔とまったく変わっておらず、すべての会議には男性が出る。村の中で、全員男性の自治会や農協の理事会などの話し合いで全部決めてしまう。

農業委員は、その地域の農業政策と農地の問題を審議して決めていく。村の持ち回りになっており、本当は選挙をして、女性でも手を挙げられるはずなのに、みんな順番制で決めてしまう。次はどこの地区の当番だから女が出たら困ると言われる。女性組織を作り、代表して出ていって地域を変えようと言っていても、今度はお父さんの方に圧力をかけて、お父さんから「やめてくれ」と止められることになる。ずっとそれで来ているから、なかなか地域は変わらない。

行政などにも、ぜひ応援してほしいと働きかけをしているが、どこかで消えてしまって、「自分が出たいから言っているだけ」というような形で抑えられてしまう。これからの農業は、ソフトとハードの両面を支えるところで、男性女性の声をきちんと入れないと成り立たない時代だと言うのだが、進まない。辛うじて、そういう意識を持った農業委員会もあり、女性の声を入れようと言って、女性が入っているところもある。また、農業委員には議員や農協から１名ずつ入っているので、今回は農協から出さずに女の人を入れようかとか、議員の枠を１つ減らして女性を入れようというような話し合いを、行政が指導して行っている所もある。全国でも、長野県では女性の農業委員が多い。そういう所は行政でも、農家の男性への指導をしている。男性の意識改革と行政の指導が結び付かないと、なかなか男性社会の農業の中では、女性が出ていけない。兵庫県は遅れている。

神戸は農業がすごく活発でお父さんも元気なのだが、農村全体が落ち込んでいるような中山間地では、農業が成り立たないから、お父さんより元気なお母さんが、何とかしなければならないと行政と声をつなげる場に出ている所もある。農業委員として女性を入れて、地域を変えたいという女性が一杯いる。

（委　　員）　教育界の問題も大きい。ほとんど全ての意識調査に出される設問「今の日本社会全体でみた場合、(1)～(8)（家庭・地域・学校・職場・法制度上・政治（政策決定の場）・社会通年／しきたり等で・わからない）において男女の地位はどのようになっていると思うか」において、常に圧倒的に高い割合で「平等になっている」と思われているのが「教育の場で」。しかし教育界では、いつまで経っても校長先生は男性であり、特に市町レベルではそう。小学校、中学校の先生の半数以上が女性で、高校の先生でも半数近く女性がいるにもかかわらず、校長、教頭はほとんど男性。これでは子どもたちが、校長先生、教頭先生というのは男性がなるものだと思う。女性教師も学校運営に積極的に責任を分かち合いたい。

また、県民意識調査結果の中で、男女共同参画社会について学校や公民館で学んだというのも少ない。マス・メディア等の効力は分かるが、まちの中核的な学校や公民館といった啓発・学習の機関もがんばってほしい。

(3)　閉会

文責　兵庫県企画県民部県民文化局男女家庭室